成形圖說

農事部 三

145
30
1

東京圖書館

和書門 農 一四三
類 一五
函 一〇
架 一九
號 三〇
冊

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用

成形圖說卷之三

目錄

時節（トキヲリ）
占歲（ヨメウラノ）
風候（カゼオモテノ）
附四季（ヨツノトキ）

TOKIO LIBRARY
東京都立日比谷図書館蔵書印
FOUNDED BY MOMBUSHIO
明治八年文部省交付

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

成形圖說卷之三

農事部 時節類

登伎袁利

書紀○即時節也真字伊勢訛ㇾ之訓ㇾ里

時節

左傳疏凡春秋分冬夏至立春立夏爲ㇾ啓立秋立冬爲閉用此八節之日登觀臺書其所見雲物氣色○易緯卦象傳云君子以治歷明時程子云推日月星辰之遷易明四時之序也夫變易之道事之至大理之至明跡之至著莫知四時推日月星辰之遷而知時節之云爾一時節之差典之昊天歷象之謬又日月星辰之運行重仍之失天日之不合月星不見曜之變借而後人地上之在其日月之交會而測其中極之星位而觀其天行之度以知其日月之數次第焉故曰戴禮曾子云聖人慎守日月之數次序星辰之行以序四時之順逆謂之歷名義如此矣舜典之七政其說新舊不一又未發之建明故○孔子云行夏之時夏之時八今之節令之謂ㇾ之殷周八冬

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

耕耨之候凡民事早晩之所關也管子曰凡有地牧民者敬在四時黄帝云四時之不正正五穀而已耳國語云三時務農而一時講武三時ハ春夏秋ホトンテ其一時ハ即冬ナリ民の農隙ホハ武術を講セシムルを古ノ凡等中四時ごとに毎月二節都テ廿四節ヲ分然ルニ節序ヲ遅速ノアルヿ此ノ當年くの曆あり真曆考曰上ノ代の四時ハ曆乃節氣乃別ナクシテ其の始ハ不謂立春の古ニ成リテ立春の次ヨリ二月の節乃次マデヲ其の始ト夫より三月の節の次マデヲ其の始トシ四月乃其の次マデヲ其の始トシテ其の末ヲ夏秋冬ヲナスヿトシテ初ヲ一ニシテ終ヲ三ニスルヿ

三

を以歲首とせしゆゑ時令正うるゝ

蕃名テイト

孝徳天皇詔曰天地陰陽不使四時相亂惟此生民萬物之凡當農作之時宜早務營田令畿内及四方國催課農桑夫時節ハ專耕作乃上ニ係りてつゝしみおこなふ凡俗間ニ時種時為付時ノ上ニ時丸納ニ時などいつゝしみを稱稽の時ニ云ふ又節折折節ニ柄ニなどを即時ニ蔭ともまるとやかゝるとよりて時ニ云ふ○物乃おとしいつゝ○又度を二度三度のおとし時の字ともうりよりとつゝ書、尭典敬授人時ノ註ニ謂

まて始まりハ来るはそいとうどを某月とくとく一年を十二月と定もるおとハあるうるき
宰府進新羅暦與本朝元相違但十一月十六日自太宰府進大宋暦與本朝暦符合同同年十一月朔旦賀條曰我朝異國其暦相違古今例多然而公家不必用異國之説の時令直ス年号の名ハ係てヲ按ふ命るるの春秋農事と経始るを係ふ本ちる遠足公の遺天地と書籍ふ日月と澄明とるふるハ是とつ按古事記傳曰年ハ田寄也タヨとりてトとなるさてヨセヒヨザミとる例古よ多一ツ登志ふハ穀乃事なる甚ハ神の御霊ヲて田よ寄奉ゆふよいつる四よりまとふとふ後ハ穀を登志ふとふせ古俗贈物の時向よりヲ又ヲ多入てと年

実とふとふ大神宮年中行事の條ふおゐと入て年実と号ケて稔るる所乃年実ハ年穀の意とふて志みてる人の厚き遠習なるべし○ハ塩ふぐ盛ル返を所乃也○日次紀曰正月也士農工商各執贄互相賀名テ其祈年祭祝詞ふ皇神等能寄志奉贄ノ謂年王ふ此意ふり弁奥津御年ヲ八束穂能嚴穂尓皇神等能寄志奉着云々又大嘗會乃時齋院を擇て御年神大御食神と祭ふ所を見よふまり奥津御年ハ稲をつふ八束穂ハ稔の申みを晩くふる所ゆ多奥とふなる所ハ稲の申みてを晩をおくてとふみて知ぐ始て穀を一度取收を一等とふは云ふ年終乃月新稲ヲて餅つくりて名て年穂と云始て年餅を食ふと年穂とふと歳の稲を收て家家を迎ふ

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

るあり又稲の始て生ふを若穂
やゝむあと歌ゐ添めり
春ハ草木の芽發の意を歌ゐ末芽春雨とふみを也〇月
令孟春是月也天氣下降地氣上騰天地和同草木萌動王
命布農事ヲ
蕃名レンテ
夏ハ成立なりと省きタ是稲の成立ゐよまを一説ゐ
夜ハ明つきの暑ゐ是 後柏原天皇の大御歌夜冬ゐた
なつめはを天津日乃ちむさめるまでみる

蕃名ソームル
秋ハ阿加利みてとかりはキ是を稲の赤らむをふ赤
アカルとゝる例多し 四季の夏秋を本此意みて稲よまを云名もり
一説ゐ秋ハ飽足の意俗ゐ秋よまを言あると〇壮
子正二秋而萬寶告成〇月令季秋之月命冢宰農事備收
蕃名ヘルフスト
冬ハ殖ふを年穀成て恩頼のふみのをふを名称好
忍歌ゐいとなみをかひなき身ぜへ急ぐ我ゐ海の如
とう信ゐいのちを俗ゐ生のまゝ生乃行きと
ゐを恩頼の吉兆をいつ一説ゐ冬ハひゆるの轉や

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

蕃名ウインドル

正月ハ生月也発生の始をいふ
いふがごとし俗ムツキ生ムスと訓を息子とムスコ息女をムスメあど
や百事乃考の明乃始ふるふのまゝ和異名佐美度
利月ハ小緑の意先年くしてさみどり月なり初春
ぬる月ハ所さへあしく小松ひくまの遊之
狩ふる年ふぐら立春ハいちえふし霞初月今日も牡山風
まくのちの空乃月後冬羽天皇雪の
生名津かりや初春月霞うら初日乃新のど久
霞そめ月定家そめらん家隆そめらん初年端月梅とや風
禮志月くれし月子ゆかり陰らんやなりぬと
しは月名を昭らし亦初見月初花月子日月とかゝ
く俗にくらしふ
遂ゝ正月を太郎月といつゝ二月と第月といつゝ○埋
本草註ゝ太郎月より通こちて三郎月までをいふらし

花ゝ接るぞゝ也おし

蕃名ヤニエヤーリイ

二月ハ氣更来也生氣更ゝ発達をいふ

蛍ぬぐゝまもなくゝ異名宇米津佐月蕾のかよそぬ里
盛るうめりの宿いらじ花
ぬ屋の多くゝ家隆
ぬる月ゝ友則小卅生月みぐるゝ
ぬる月ゝ空泊しゝ卅生月ふ月泊
梅見月四人をふさなにの梅ゝ月ふ月泊そゝる武蔵野の景昭
沼せの秋の雪きえ雪消月年ゝえて春
月乃頃をふゝむ梅津月ゝ家ゝ
蕃名ヘブリユヤーリイ

三月ハ弥生也草ふゝて生氣盛るゝ
は来妻さくおべの市
咲こそゝこ指や後来異名佐波奈佐月なにへ
ゝ

きちゝきのはぐゝ新雲ハ
夫ら雀や
よひゝ成
空を啼く
ゝきはなち

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

月は裏やふ[illegible]の花見月[illegible]
[illegible]なれば華見月[illegible]
月なんて今風[illegible]
月[illegible]の四方の山の端[illegible]
[illegible]の表を華津月[illegible]
[illegible]家宿[illegible]
見月[illegible]初瀬の山[illegible]
[illegible]のなごり月[illegible]
守よ始[illegible]漢人[illegible]船[illegible]
[illegible]事次[illegible]
在春[illegible]春之富、在[illegible]于是月[illegible]
[illegible]
臣賦[illegible]詩今日潮干の事万葉[illegible]
[illegible]
かつ[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

四月（ウヅキ）八種月也稲種を植るをいふ

一説に卯花月也 万葉に卯花腐しといへる意あり 西土も云 迎梅の熟を候ひつゝとぎ花よみ梅雨の事とさみ堂まで八梅雨の事とされど日よまつゝと漢名よりつゝ神名る和名也 夏のさうじをよまつゝ師兼異名古乃波登利月をよまれしかくわる奥山のそま人にかくれてよき月夜にかくれはの月をよめるおほ得鳥羽月 蒼のはつゝ山ふのこゑ 皆旧説○一本に花残月 蒼をかくれ乃名ぬや 跡岡羽乃月 皆旧説○一本に花残月 蒼をかくれ乃名ぬや 皇卯花月 左傳のうつし跡乃月 る月 皆旧説 夏初月 子規 参照

山乃の花月と何といもまじ

ふみ月 皆羽乃山乃垣のいはりて

蕃名アプリル

五月（サツキ）八幸月（サチヅキ）也 幸八農事をつとめ出やりふの月稲苗と

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

分(ぶ)栽(ざ)るなり小倉山さ月のころ名知家異名佐久毛月又名早苗月又名五月苗丸ろて田子作法こと即農事をつとめもち池をはじめの田艸月やめりあるかざし(さくら月とて小野篁五月雨に空もくらくなきちくもなじ漢月雨くらさ月といふをいさなじ(漢名礒男深月加何して菱花小笠とはして釈んまぼ(ほ)ろの空の時雨をそそぐぬ五月雨ほど

て地獄までも責めべき女ハ呉竹の節よりも逢縁の多を勤め男共をまめやかに己のに利ぞ外を幸吉さんこそ功速海を渡るも仮の舟とハ知るべし

蕃名メイ

六月ハ水月也稲田よみを引をるやをのれうにみを乱してよ異名伊須々久礼月暮涼弥涼暮月風吹ハ池ハ波涼暮月風吹ハ池ハ波なりいふくれ月の明るよ来かをしつくれ風待月松蔭よりさよ常夏月蓬ふるふ花の盃と後鳥羽天皇顕昭白雨ハ稲妻やふる神の月鳴神月ありぬ夜や雲ふる雨ふり松風月乃今日ふりハ

うせ月のなぐれそあれ

蕃名エーニイ

七月ハ穂見月也此月稲穂出見をもつてなん佛ごとのごときよ異名米泥安比つき立迄ハ負文いうこおろのうれ秋初月風ふくしかるうて海外人来笠七夜月ふこはしの今日やおりふ迄七夜月ふ萩乃変れ宵のはぎれよ女郎月乃契乃色にたくくてもを名をおしもをみ為つし月顕昭ぞふる文ひ棚機月かさくぎのよ乃ろぎ月乃糸棚機月よたまはゝ自乃ろ為ふえろう東遷

◯是月を親月とを称ふおとはせにまよ迄ろ又生神霊とくふおとを親長日記文明八年七

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

月十一日の祈ㇾ歲らるゝなき魂を祭るもろ人の
子ㇾるゝ父母具存を慶ひて生御霊の礼を行ふ俗ㇾ諺
子祝ㇾ云 年中行事盂蘭盆の類みて今日七月
の日をそあらん 魂祭ㇾる
蕃名ユーリイ
八月ハ葉月也稲葉の色を変るや秋
らめ尓をそ 初雁の来きゝゆるより異名佐
佐波奈佐月さく花さ月盖亦農事ㇾ
わはや秋風萩の葉乃雫ふきこぼれ
笋藝 ㇾ志ことを先しあきの夜月夜
見月名ふ一夜ㇾ秋のまん中の空晴て
先さとある月よその月長明
してきそめ乃月也仲津月をくに
ふふられあ升ㇾ家少津月迄くさ

(タノミ)
なお○是月を田実といふ子里の歌澄ぐし抜よ 後嵯
峨天皇八月朔日に新穀を御(ミ)て田実(タノミ)と宮ㇾたと著聞
集に在ㇾ辨内侍日記宝治元年八月一日の歌にも
又そゝきの名をかへてたのめでふるき句を
ある听雨齋集八月初吉詩序ㇾ
為憑(タノム)日以資(ヨリ)相贈(オクル)昔は今日田実(タノミ)ㇾて早稲(ワセ)米をわ賀かは
ら事ㇾ感て親戚ㇾ盃(サカヅキ)を取(トリ)ㇾ
ㇾ天下ㇾ流布(ルフ)せりとㇾて今京師(ミヤコ)
康富記に八朔乃事 後鳥羽帝乃(ノ)
蕃名ドウギユステユス

本邦風俗名仲秋朔旦(ツイタチ)

九月ハ夜長月也此月ハ事方ヨリ通宵ヨモスカラ
ク勤労イタハリ
の時ハカクミてを此月と長月とハ
昼の月ハ打ちわれぐ〳〵もなり異名袁多加利月さびしさハ
黄之ばりキ常磐山いろぐ〵月よ後ぬまバ紅葉を
取月さく〳〵すさく〳〵ちらまもみぢ寝覚音
枕乃称ざめ月よハた工葉ヨミギ
つぬもよ夜ぐ〳〵寒露紅葉月みぢ月時雨ふりまして
ら迄けるり菊キク開月さく卅ハう枯もて
ツキ月桐コスモアキ秋ともニッポンナブリ云〇古今集の三鳥の一ッなる稲負鳥といへ
る八鶺鴒の事ニて二柱の大神ハ此多の首尾ヲカシラを動ヨ
あ〳〵てえゝめまくぢひはいでそめもるヲ絶のお
づ〳〵ふる生動乃家ヨ慈もるハ性游ぶ魚をそてヨ土

乃深つるを踏ふるがごとくよそ山多のまる吹しをめ
秋田をりをもる乃第フミをがゆゑよ稲課イナオクセとり乃名
あり兼風集ヨ辛〳〵ていを記刈つる山田うち稲ね
を多のうしろめぐるに一汉ヨをつ里又稲ハ名とりく負オフ哦ヨウ
惰よわうてかゝやうよやうと回ひ人てをと定るハ
の塚ツシをれいのとや

蕃名セプテムブル
十月カンナヅキ八神嘗月カムナメヅキ也古ハ此月神嘗會ヲ修ナ仁事並ヨ神武紀
又類書纂要ヨ薦新ヲ民俗于ニ十月ニ炊キ新粢ヲ薦ニ之ヲ于先塋ニ後漢
書註ニ正祭外十月嘗ニ稲等ヲ謂ニ之ヲ間ニ祀ニ曲禮孟冬之月天子乃ヲ

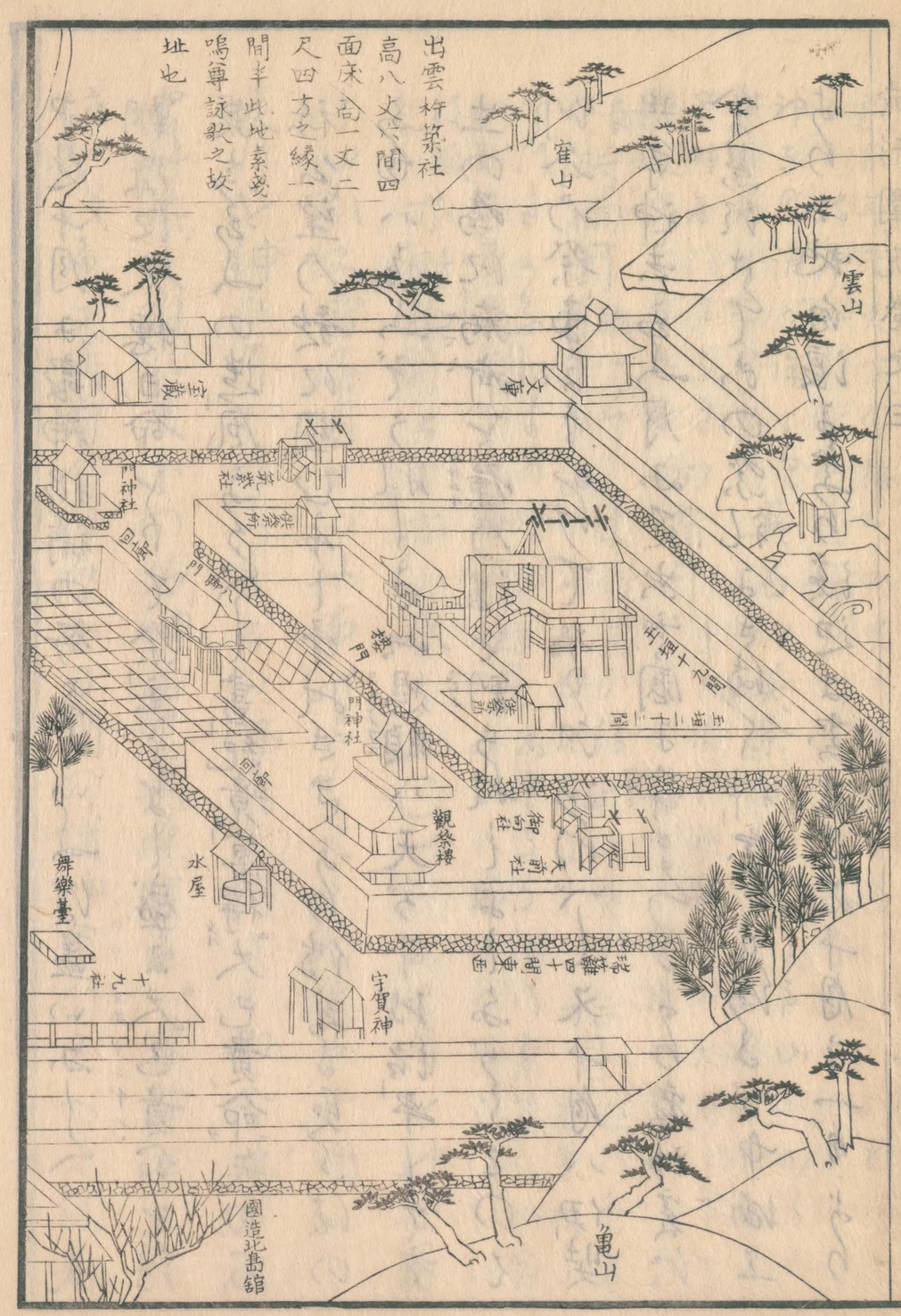
国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

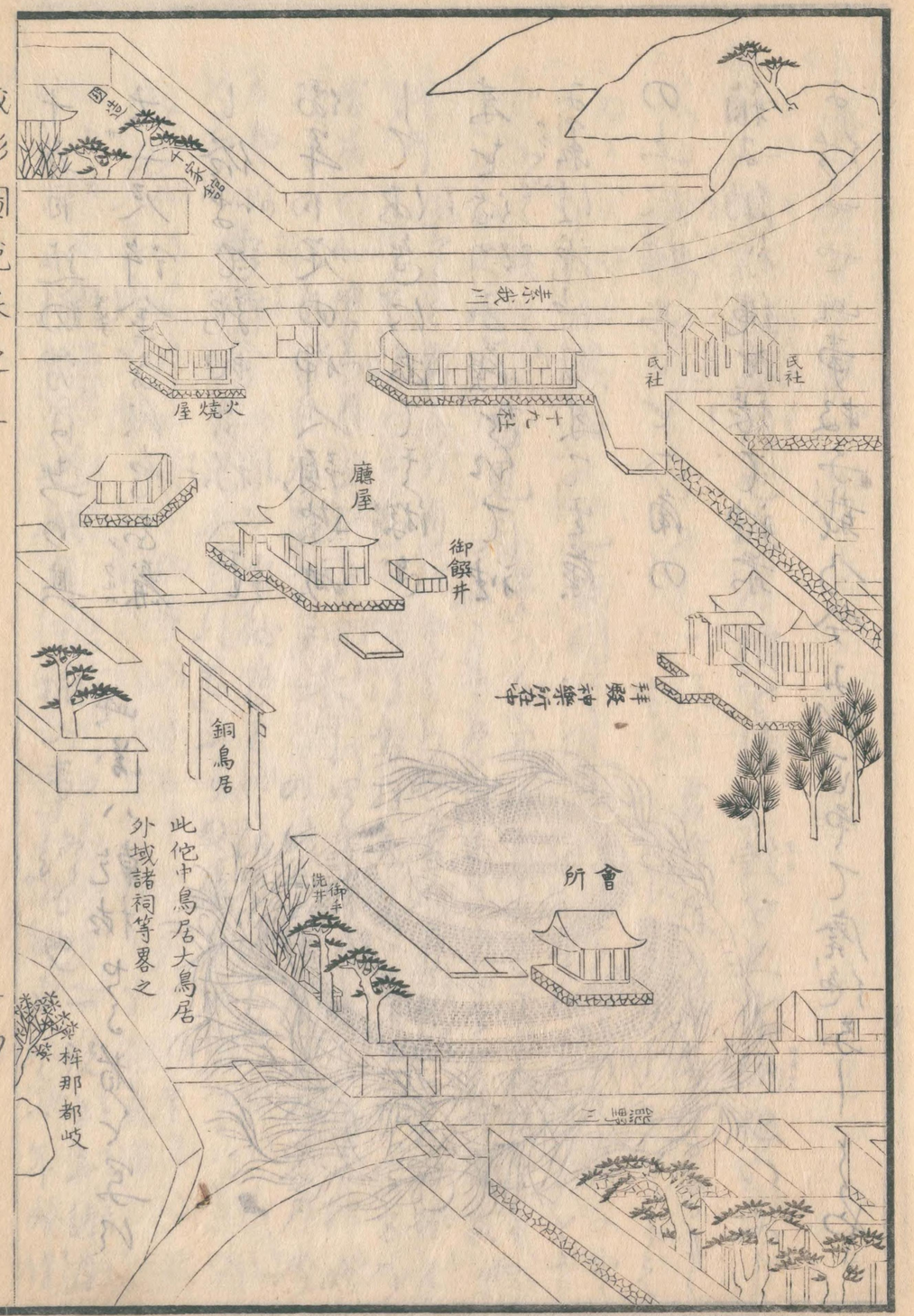
祈(ノル)來年(ムカフ)干天宗(ヒデリノムネ)ら按々の文の日々是盖(コレケダ)いみしへ神嘗祭(カムニヘノマツリ)
るま秋年の穀をとてもるの遷也(ウツシナリ)俤(オモカゲ)のなきをなげ
神な月波が詠よりも利月(トシキ)よりを山(ヤマ)かく
時(トキ)雨(シグレ)月(ツキ)なんそ異名加美奈(カミナ)利月(ツキ)ともいふ
里時雨のいさあき初霜月(ハツシモツキ)ふをふ
神あらう月患音(ウレヒ)初霜月(ハツシモツキ)が詠をもとゝ
長(ナガ)時雨月(シグレツキ)散(チリ)てゝ木の葉の後(ノチ)せ
ぬ時雨月冬乃はしめに何を染(ソメ)ま
字(ナ)きうふ松(マツ)の外神去(カミサリ)月雪(ユキ)ふる松の葉(ハ)の宮
ハ祓(ハラヘ)るまゝおし影(カゲ)給神去月雪ふる八神さり月と何をい
はゞ亦樹蔭(コカゲ)月さも亦小春(コハル)とゝ〇一説ゝ十月を神無月
しといふ又雷無月(カミナシツキ)といふ事れよし
是月を神在月(カミアリツキ)と唱(トナ)ふるの俗(ソク)諺(ゲン)よ按るまや今按ゝ出
雲杵築(キヅキ)大社ハ天下の名神ゆて其本宮ゝ客神五主乃
位を設(マケ)ゝ又廣前乃左(ヒダリ)ゝ小日國の諸神舎(ヤシロ)ひむつる相あ

卯(ウ)ゝ是十月ゝ寒神招禱(ヲキ)の所あぐいよは盖いみしへ天
朝(ミカド)ゝ按ゝ天穂日命(アメホヒノミコト)をゝて祭主(マツリヌシ)となし盛(オホ)ゝ大己貴命(オホナムチノ)を寵
異(メグ)ふまふの造風(ミヤツコ)ふるぐし書紀竟宴得(エ)ゝ大己貴命(オホナムチノミコト)ゝ矢田宿
祢公望乃歌ゝ國(クニ)もゝし手(テ)ゝさきよふ佐(タス)ふる奥(オク)ゝはの
ふ白(シラ)ハふぞうしき此恩頼(ミタマノフユ)ハ天ゝ下(シタ)ゝ治平(ヲサマリ)して有
生(イキ)の為に病(ヤマヒ)ゝ療(ナホ)乃法(ノリ)と創(ハジメ)られしよしふぐこのそ
れ冬乃祭事(マツリ)ふもかけてあり(アリ)ゝしぐし又十月ハ伊奘
冉尊神去(カムサリ)ふ月ゝて出雲國ゝ幸(イデマ)ますより寒神宴(カムアソビ)ゝ
舎集(ヤドリ)ゝてゝの祭礼(マツリ)よさゝ後(ノチ)ゝ神宴(カムアソビ)ふ行(オコナ)ふ中酉上
より小蛇白浪(シラナミ)ふ寄(ヨ)り渡辺(ワタナベ)ゝ来(キ)ふる元(ハジメ)十月十一日(トヲカ)より

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

出雲杵築社
高八丈八間四
面床高一丈二
尺四方之緣一
間半此地素戔
嗚尊詠歌之故
址也





十四

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

十五日近の宮より其
大一尺許金色の毛赤羅
し俗まて龍蛇と称へ
俗年ト定の神人預潔斎
して体色にあてそ浴ぎ
衣を纺ぬ藁をもて神
み象ば龍蛇自来て藁
の上に蟠坐るとや角の
箱を納標縄を張て神前
み供よせ此事数子載乃今み到里ぬて廃絶ふ一とや

番名ヲントヲブル
十一月八稲春月也此月稲を搗く籾を土下納せいみ一
へ八穀搗を春といつに雪降ぬる異名志毛古利乃波月
霜月の雪けみぞ残りふる人丸 雪見月雪つる言ふ
降月風雪を霜ふり月れ雪よりそ
宮居のめぐらを立榊葉神来月
乃まのうち垣けさ定家 神楽月白拍子
そやなし雪待月山風を雪待月
くらん
番名ハムブル
十二月八稲終月也此月田稲の事終る也一説ま年終月
や又八年の條

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

ありと云ふ。農事終るや、後成の歌よみ、
稿をとりて、山田の冬に渡てうそぶきまはる世の人種、
なれ夫年穀を納と云者乃治と
し○俗とまくらことばの事にあやまりつゝ
れ故に異名登志與通年月かさ
業平
三冬月ゆくゝもある時ぞとよめる
月ひそうふ精る雪の間け
よそに光もれどまだ春なれ梅初月花
月のいそがれき折長明
色めく親子月吾いとの御竈を
所昭
今取此志毛月志波須乃両月乃名ハ神楽歌に神稲舂女
乃きよめきさはりかれこゝろ
○古ハ舂乃事と歳の終と
親月は名も曽丹集にみる年終よりも今日と

閏之始仲哀紀に皇后敏達紀に潤月と有るも潤餘乃
義なれバ也二年の所に歳毎に閏ハ
蜻蛉日記に和二年の月ぞ
清寧紀に後月と初めてみえたる年と有るも潤年
とあるも皆典以閏月定四時成歳○穀梁傳云閏月者附
月之餘日也積分而成于月者也　史記秦宣公
初志閏月　天の運行三

百六十日を立て月は大小あり六日を氣盈とし又の六日を朔虛とし此過不及を合て十二日三年積て二十六日の餘りありてを立て三年に一閏を立る五歳ゟ再閏十九年かして七閏に及べば餘分なし是を一章と云ふ凡天周三百六十五度四分度の一とし一日の事今日乃初昏より明日乃初昏まで一度と立て何ぞ天ゟ一日ゟ一度づゝ西へまはるを三百六十五日の上又一日と四分に別る一行ゟ一日かくのごとくなるゆへ一年ゟ一日ゟ四分ゟ一日ゟ積ゟ一年ゟ一閏ゟ立ゟ故ゟ日月常に天行ゟ追却ゟゆへ明人のみ

ならず夫日月かして豈蟻虫のごとく是あらん我蓋天周乃日行より見ゆる日の大氣域あるゟ遥れて運轉の速なる再彼著ゝた特和蘭ゟ餘日を一月づゝ配當て閏を置ぞ又閏國ゟ已来の子何百歳と暦代を紀し年歳改元等の事なし○或曰閏月ゟる歳ゟ時候を三十日後ゟ為ゟ事ゟ多ゟ農家ゟ三十日妻ゟ為て荷物ゟ負ゟ候の差ゟ如ゟ且春日和蘭ゟ秋ゟ温かゝ故ゟ閏年ゟ一候ゟ多ゟ農家ゟ来等の花事ゟ業謝を歓て荷物の節ゟ如ゟ是ゟ為ゟ事ゟ多ゟ暖ゟしば起さゝゟ時ゟ如ゟ是ゟ為ゟ事ゟ多ゟ秋風吹ざれば業遅ゟ来の照降ゟ如ゟ開蕾の遅速ゟ如ゟ農事ゟ都ゟゆゝ

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

なく時よ後もあやうみんをそちうで野(ノ)漬よ前いて
ぎは後いをぎくいみさと農家の第一よ志ぶきわざ
なをいと小田事を年月の名よ係てくいてみてきをと
特(タノミ)て耕作を為(セ)とつみすはてくい須真替(カヘ)考(ヘ)曰いみへ小
を秋のおのたくれるおよみまて
知(ツ)るを取へ民小授ざまぐを時小みづくよくるさ、
ゆく名をを一日(ヒト日)をつぐくよ来(キ)
とみてを去(コン)年まをおを(ヲ)春(ハル)彩(アヤナ)のを花咲を見てい苗代(ナハシロ)時
とちり化りおさ麦の独のたくむを見てい田植(ウ)る
時を志まみその稲の刈(カル)時ををて実まく時をるうご
とく年くまかくをそゆうばいうでき時この志をが

ふをるふたくむ○九田を植るの業を佐(サ)くふあよ雪
苗を佐苗といを植(ル)之女お佐(サ)ト(ノ)女
開(ヒラキ)くを其まを絶(ル)を佐(サ)登(ボル)ふくくを業を習ふるの
月を佐月(サツキ)くを須の面を佐(サ)乱(ミダ)と
魄(ベ)とく麥(ムギ)小春の季ろ時按農圃のまをべて佐と
いを佐小真と通つる言まて農事は天道のまをとり
真田を佐奈太と訓るをおりくぐし文幸を佐久と訓め
るおふ万葉おいてくりを苗(ナヘ)田の業(サヲ)を
称(ホメ)ていしくふ又えくり雄畧紀おい真鋒(サキ)田とおり
幸福の字をいさきをへさきをいと訓(ヨミ)やりきと訳(ヨミ)くと通
つりあよさきくともきくともいつりさいは俗言(ヨミ)をり

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

○夫田地ハ耜耕を第一とす次是を春田とくゝ耜は陽氣発散の時ゆゑ耕ふかくして土壌をよく膏き解て地脉よく通り潤ひ起易きもの國語文公云農祥晨正日月底于天廟註農祥房星也立春之日晨中於午農事之候也凡耜の耕を打起すハ冬月より春の氣は反り土うら〳〵いい仲春より後ハ凡田土膏澤のうるひつふるものなるを冬月より反ては氷霜ふ閉らまて耒耜を動さゝる事なき故なり又田土用ふハ土をよく碎ひて塵埃ふりて土の性秋冬ハ重く春夏ハ輕くなりて肥あり

自然ハ土と炭と同く重りて土輕き氣を盤炭とふくれ史記ふ見えたり○秋分の時を天日晝夜いとゝ時ゆゑ地氣も和暢し土を反すよく絶氣なく秋田とくふ耜の時ゆゑ自然ふ則ふくて田民ハ人の倡諭指揮ふ及ぶ五穀ハおのゝまて苗芽て四時の節序ふそむく事なくして而春秋分の二時を時正の運行次第ふ生成るふくゝて耜と云ハ此時天日赤道の天中を運ひ行ゆゑ四節の内ふてを寒暖ふ合て農事ふ差支なきやうふそなふ唯農事のこれらぞ耜耕ふ春秋分の節ふ行るゝ晝夜ふ作用て耜

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

出次第一為事のまろもて成功の速なく時ぞ冬夏の暑
寒ふおりふしの招よき是を動作かまあるものや俗謂彼岸
の後二日なり埃囊抄に曰彼岸ハ晝夜齊等如比西岸ヲ左右均
等上故に云ノ到彼岸とハ佛書よ出たり俗に秋分
日前ハ秋酒成まり僧よ彼岸をるて寒の節ハ入て
造まる酒ハ六十日を經ざれバ出さず人間の釀ハおほえざるて酒の
や地ふり生育まれハ鹽又冬至
このふなるまふぐ
み備まふこと二十三度凡一度ふり六町かして八里七町十二間
ふ是まで極儀の至と云此時大かの表を種畢ぬて又
好るの方とまるぐ夏むとて天日赤道よ里ふ南
北よ去ふこと亦二の三度まで極陽の至ふて此時

早晩稲を種芽る始ふり終ふまの
時ハ中道の節ハあらざれども春へ復
るゆゑ儀の中を陽ハまや等し
つゝ来ふまり寒ふ田を耕し種蒔播ふを常ふ時よ先
学ぶるどて仁遅て時よ後ざるやうみぐ
ものハ成実ゆく実所ふよりの里
まふうみて大凡畿内ハ北極星地を出ふと三十五度
東奥の極ハ四十度西南の遠ハ三十一度まで
通正の土地ゆゑいづまの不思を五穀生ふ出生ふ
の上國ふり漢書通典及宋史明史
などまを倭國ハ土宜

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

五穀ふくつて五禮通考ニ云自中土而南寒漸平其冬或如
春秋爲而一歲兩夏者有矣赤道之下自中土而北寒愈甚其夏
或如春秋爲而春秋已同乎中土之冬矣赤道北四十餘度
北極出地四十二度強南京のかき南地の中土ととゝべし
大強故ニ南京のかき西地の中土ととゝべし
德墨多國ハ天氣日雨ふり西極の泥入多國ハ海中ニ雨
ふる五穀稔らず衣服給ざるなど常ニ恨と欲ハ田
畝の耕ニ力ともにせざるハ是非あるまじきことなれども
のハ上ハ天道生ゝの德ニ感受取て地ニ播し培養

そだて生化功と相ふくて成ざるきなきことなれども
のかをとゝのへ耕ハ物ニ先ち耕ハ物ニ後ち耕ハ物ニ
耕ハ物ニ常ニ農業ニ勤めて樹藝ニ力ともにせざること
となるべしやもたゝ西洋ハ陽國ふしてて寒甚しき陰の
ごとく腐乳蟲なるハ陽の働がなきニ連なれる陰ニ
て地中ニ冷なる氣ありてそれ根入ル物ニ根
切虫ありて地ニ生ずる虫ハ平原の地ニ多く生ずる虫ハ
地下ニ腐なるもの地上ニ生ずる虫ハ蝶蛾ニ化ずるもの
ともニ地上ニ棲て仍ニ化ずるもの地下ニ棲て仍ニ化ずるもの
ありて但油虫ととゝべし仍ニ化ずるもの
國一統の虫よりハ仍ニ化ずるもの多し
暑き蚤なる夏ニ生ずる蚤ニよりて用一ニ
して西國のやうニよく跳ずる蚤ニ
非ず東國ハ暖ニ多くして寒ニ
おもふニ日ハ少し約
ふるて麥禾を傷ふ
るさとあり孔叢子云永初二
年夏河西縣大雨雹皆如斗殺ニ畜生雉兎ニ折
樹木ニ冰雨ふるとゝ言なり即雹ニて說文ニ雨ニ冰ニ
也とゝ注やりはもの偏陰の寒天ニ
衝昇て即ち
あれそゝの

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

甚輕者以牛羊踐之如此則土强此謂弱土而强之也春氣未通則土歷適不保澤終歲不宜稼非糞不解愼無早耕須草生至可種時有雨即種土相親苗獨生草穢爛皆成良田此一耕而當五也不如此而早耕堰硬苗穢同孔出不可鋤治及為敗田秋無雨而耕絶土氣土堅塔名曰脂田及威冬耕泄陰氣土枯燥名曰脯田與脂田皆傷田二歲不起稼則一歲休之凡愛田常以五月耕六月再耕七月勿耕謹摩平以待種時五月耕一當再若七月耕五六月耕一當三不當一冬雨雪止輒以龍之掩地雪勿使從風飄去後雪龍之則立春保澤凍虫死來年宜稼得時之和適地之宜田

なれば枯物を取ふうにのぞいで次に水雨八山中の凝水と夏月暴風よて吹揚るゐと記勝之書云凡耕之本在于趨時和土務糞澤早鋤穫春凍解地氣始通土一和解夏至天氣始暑陰氣始盛土復解夏至後九十日晝夜分天地氣和以此時耕田一而當五名曰膏澤皆得時功春地氣通可耕堅硬强地黒壚土輒平摩其塊以生草草生復耕之天有小雨復耕和之勿令有塊以待時所謂强土而弱之也春候地氣始通椓橛木長尺二寸埋尺見其二寸立春後土塊散上没橛陳根可拔此時二十日以後和氣去即土剛以此時耕一而當四和氣去耕四不當一杏始華榮輒耕望杏花落復耕耕輒龍之土

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

雖薄惡収可畝十石○夏至東南の方より
光物入ゆくことあり之を稲妻稲光稲交など唱ふ俗
に稲光多きときハ稲よく稔るありと稲の夫をを妻
ともいふ依て里和名鈔並に稲の名義に係るまじきにあ
らず又稲妻ハ稲妻ともなめりと古今六帖ハ人志ものを
ものうらとよめる歌ハ秋の田のこゑハ人志ものを又雷ハ怨祇み
てよ日水鳴ともいふ火神日奇祇の生ずと書紀またえ
うり日火の激奇あり雷の始て鳴発の時日氣地中より徹
里出るときハ稲妻ハかけうせ雨ハ農耕を仆をどきの時といひて
百果草木皆甲折韋應物が詩ハ微雨衆卉新一雷驚蟄始

田家幾日閑耕種從此起按ニ天日の火氣地下ニ蘊
蓄シ陰雲ニ逢ヒ水雲ト激擊シテ火氣發ス中天ノ水雲動盪シテ
激聲山川ヲ動シ大塊ヲ震ヒ陰陽ノ氣ニ感ジテ火ヲ發シ
ツケテ激シ鳥銃ヲ燃スガ如シ又大ナル塩硝ヲ地中ニ埋
ミ置キ其ノ氣ヲ散シテ雷ヲシテ之ヲ由ラシムルトキハ
雷大益救ノ巓ヨリ墜テ雷ヲ作サズ地中ヨリ起ルノ況アル
雷ハ必ズ地中ヨリ起ルノ況アルヲ五雜組云雷之形人常有
見之者大約似雌雞肉翅其響乃両翅撲作聲也宋儒以
陰陽之理解釋雷電此誠可笑雷ノ雞ヲ似ルコトハ續
紀ノ中ニモアリ五雜組ヨリ早ク郷ニ或者雷ノ金鮮ヲ向シテ
ありて腹中度ニ鳴ラシメサルヲ白ヲ對シテ白ヲ
と考れども今年六十二まで終ニ
ぐらいなるかくくりなて鳴やうし
ニ此ノ神妙後場ノ不側ハ吾等
笑ひしとうや見ハ五雜組よまさり
の氣ときいふよて大鳴のたよる者
ふつ一もり雷鳴時ハ恐怖ヲ隠セトモ云ヒ
とあり或曰見ハ俯ぶして心氣を冊
ヲ冊田ヲ冊ヲ冊ヲ冊

あり凡雷雹うつ時は磐磐撲ち破き
石木は葱なしあるは人を立みては亜ま破ま
傷るのみある秋の氣候よなれば天日漸く南ま
ぐりて雷
鳴を稍靜まて激奮なく順次光の
霹靂の日香天の九月ま添めふ号
や一況ま熱閃ハ山中
の巌石より起發ぐいてりこの時ふま猶程を方ま登
熟をとてき尤物ま託て名市ま
てき年穀のゆかもていこれ言ま想ま代亟記
ま越後国ま八冬をよのつるのだ
雪の始て降むとていおびたしく
湯涸のかはをまされバいうんして雷ハなるをぐ治

き電光ハいぶふものとい人間の知るところ
にのぐ雹ハ雪ふまたハいうまでもなくやまも疑ぬま
るをむりまる宇の川の海ま入て海ハ湍ま日出て自
のろま止ふまとまぐほがめく天地の神妙わざをい
うでもの人の知る所さぐ其迹ま
米占書紀通證古語拾遺占求ま以て始ま後新嘗ま
ふる式頭昭曰ふ占ハ探也宮ま
ま又ゆ民間除夜竈ま探ふ以来年の吉凶ま
ま色
夕占萬葉集又夕卜卿問石
夕占ハ夕食拾芥鈔夕食ま同歌ま
占ハぐ又ぐ良けをさやぐまの神ま

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

と問ば這れ人占正みせよ児女子の言よ黄楊の櫛を
枝女三人街は向ふ向ふと云ふ堺を三度擲へ堺を仮
一来を義し掃塵を仰ぎ拾ふ三度堺の角よまろく人の答よ
はて吉凶をゆうらなふおとなふ来占よ返し菜葉よ
夜占向ふ神よ多く白
雫をふぐつゝ是ちり
占歳世本云后益作占歳呂氏春秋亦云ヒ尓師曠占ニ五穀貴
ト稼禮記社之日位賤事物紀原占歳八十月朔日風從東来ハ春賤逆ヒ此ニ者貴ミ
雑編ト来歳之稼
米ト番禺
蕃名ホールセノギンクハン・レイケ・ヨフ・シカアルセ・ヨグスト
田家ハ毎年正月望よ米占管筮ヲ以テ占来ヲトテ穀又
ハ菜年の農稼を決る事ありて多く違ひ亦を亦亦ふ
ふべしなよ囲家ハて五月十五日を望年と稼て歳旦

より九大切よ祝ひ頒て親子兄第一不よ會集婦女
まで歓箭がてうよ来て両戸ひ
一囲神をまつり稲粟菽麦を始
よ入て粥そ一節そはしする竹筒若干を作る筒毎よ
粟穀の月歳を或ハ刻そ或ハ書し粥の中よ投之を糞煮
おと数沸して後よ竹筒を取上ろ筒の内よ各穀穀
の入と君と一盃よ填実とをうくばる或ハ菜の稲粱
ハ菜の稲の有年あり菜粟の粱ハ菜の稲の有年とも
み中あろハ中年あろハ多年とも
の豊稔とをて後戸ひ各占をわ訪ひ酒食を作まて秋

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

戒祝禱ある俗諺志に曰ふ河内國枚岡の神社より田祭と云ふ鄙陋より大なる釜をもち小豆粥を煮て祠具となし五穀の豊穣祈りて行ふなりと云ふ五十四本を五寸だちに伐て五穀及色々の穀を五十四ほど入て釜の中へ投一くに煮をうりて何の穀にても十分の一を減をとりて何の穀にても十分の一をよりて高きに煮出しとよく煮熟して其汁をこれを枚岡の卿粥と名づく神に奉る事也又曰弥生朔日より大釜ふて粥を煮て粥の名を称ふ五穀豊穣を祈る事也なり○大和杜ノ崇神紀の羽振苑の地ともに正月初申より亥日まで居竈の象ありと云ふ故土民等一切の農具等を五穀の種子を混雑して一器に納て神人の家の竈にて炊き神人混雑の名を称ふ民俗是を交雑まる種子を撰て當年の苗とすれば其地必ず豊年註坪雅俗云春魚遺子如粟埋泥中明年水及故岸則皆化而為魚如遇旱乾水不及故岸則其子為日暴乃成飛蝗故説者以為陰陽和則魚多豊年憂魚埋或然也戒菴漫筆に東入吳門十萬家家々爆穀ト年華就鍋抛下黄金粟轉手翻成白玉花紅粉佳人占喜事白頭老叟問生涯曉來粧飾諸兒女數片梅花插鬢斜この年華トいふ上元の夜よなど歳時記よりえらび齊民要術年の豊凶をおさおさとよりその清人

次紀ふ況えらく是亦風俗也神名秘書ふ風神の祭ふ柏流ふ其柏葉を以浮ひ流ふ占ふ年ふ沈ふ浮ふ吉ふえらえらび績古今集思ふ

の沈ふ浮ふ淚なり詩小雅大人占之衆維魚矣實維豐年註坪雅俗云春魚遺子如粟埋泥中明年水及故岸則皆化而為魚如遇旱乾水不及故岸則其子為日暴乃成飛蝗故説者以為陰陽和則魚多豊年憂魚埋或然也戒菴漫筆に東入吳門十萬家家々爆穀ト年華就鍋抛下黄金粟轉手翻成白玉花紅粉佳人占喜事白頭老叟問生涯曉來粧飾諸兒女數片梅花插鬢斜この年華トいふ上元の夜よなど歳時記よりえらび齊民要術年の豊凶をおさおさとよりその清人

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

八正月七日より十一日まで天氣和清なれバ冬歳を越ゆるよしを四季物語ゝ漢語鈔を引て大さしの夜ハもとゟこぐさつむとて高き屋ゟのぞせて蓑笠ゟさゝせ家ゟ家ゟ遊みるもゝやゝ堀川百首ゟそ海のおぼつかなきよゝと指ふぐらよゝと詠ぜしハ此月晦日登岡ニ自我両足間觀居地之氣知明年吉凶是云岡見又吉凶の氣をおしぶらゝと云續賢行曰正月元旦雨風あく暁の雲間のぐとはわるを常ちやびきて陰るハ吉とゝ雲霧日うすきハ凶とゝ按朴樹の新葉と芽ゟ連連ありて芽の遅く出る方ゟ大風ゟふるまぐなり百姓農ニ曰自然の運気淑理よ逆ゝするハ古へゟ有ぐバ多ぐふるとゝ雨ゟふらんゟ志れどゝも北宋陳旭呆風雨陰晴因き年ハ施てあるさの理ゟ有ぐ三十一年ゟハ癘屠ゟ復ゝふるとゝ年の干支ゟて国ゟ其ゟ節氣まで合遇ゟるハあゝぐ凡天氣ハ詰ゟ南北因一ゟぐでゟ其地ゟ生て山氣の天氣ハ老農ゟ皆ぐゟ浦渡のて常ハ漁史船長ゟ最ゟ能ゟ志れ又吟て世のゟ渡ゟ凡天氣ゟ考て地毎ゟ戒ゟれハ生功ゟ益ゟあゝぐゟ第ての用ゟ備ゟ

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

とおちつくハ惰懶人の通患辞をまつ

風蝗風ハ日薄を訓じ加是の反氣生の義ともいへ
蝗風ハ蓋天日の氣大地の水気薄攪せば則風となり亦雨
ともなりて物を乾し物を潤枯のをも生ずるあり
お風先ず至ればや其風止ばや則雨と
なる颶風ハ火気の薄より起りて水気従て昇まる故ハ
雨を降うじ昇里裏の風ハ空中
より横斜をもて吹ける颶風ハ又風雨一時よりも
気よ動きまた和し昇の速なるものハ
海の島地なぞハ必て強し東北の海國ハ風雨
ぞと苦しきハ稀なりとも日の南よめぐりひ移ひ従ひ
て日氣の海水を撲激の氣ひうをもち
風ハ大塊の噫氣といへるも理よ迎うはべし

蕃名ハルトワアイ 風 シカーデー
コールレン・ベイトル 蝗 ブレイキウイント 損田の風

五穀の中ふてを稲の成ルなるぞ
二ツハ在ほうなる夏より秋よ移る頃東風多ければ
稔滋ク(サカエ)て蝗賊(ヒイナムシ)あふ田をはくしと
連(シキリ)よ吹ハ万頃(ヨロヅ)の田盡(ノコラズ)虫ばき落よ
原(ヒト)ト食つぶせる東風(ユチ)ハ温潤の生気ひうて南風(ハエ)ハ蒸熱
の芽溶けるみよべし又西南の地ハ之よ反(モド)て西風と
喜び東風(コチ)を悩(オホ)をの地形ふ土のまわざなり歌よ五月
雨雲ハみあふ秋ハ北いほを東風みく雨降ともも於
ぞと思ふ方南よ向てひくばかり須東國ハ雨ふらん
してハやく西風ハ雨を催してハやく雨を晴よまれ里旦雲

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

雨ふり山よ添よそのあら山の方よりふる風おもばかるべ
き事を常ぶなる○蝗蟲の稲田よ害なすこと既よ神代紀よ
見蟲の災を記されしを始そして古語拾遺よハ其驅除
よ以麻柄作勅以其葉掃之以天押
羽扇之以牛宍置溝口作男莖形以加之以蕙子蜀椒呉桃
葉及塩班置其畔をよ今東北の邊土よ男莖の形と諸像
驅除しの遺習みして俗よ弓劒の
と祀るといふハみぞうとなるべし
十六年八月伊勢國言蝗蟲食稲其虫頭赤して丹のごと
く背青く腹黒班みして大きさのハ一寸五分小きさのハ
一寸一日食こと四五町ばかり其過る所ハ遺穂ふ

一汁項の稲虫ハ爾雅釋虫の螣蟲なるべし是月十三日玄蕃頭弘道王を伊
勢大神宮よ遣し幣と奉よ蝗災を攘よふと禱る自後
蝗虫或蝶よ化し或小蜂の多よ数殺されて一時よ盡く
滅ぶるもし又禁厭の術して蝗を解し今もそれ
めしるよ本藩の俗田よ蝗つきそうな村ハ必霧島廟よ禱
祝て虫拂を乞十よ七八ヶ災を免るよと多し皇
孫尊始高千穂峯よ降臨の時散米をもて雲霧の害を
拂ひし故実よ拠よう蓑氏曰莠虫ハ苗立て生う稠く
種をおろし苗痩て生立ふハ虫生ぜず稀く莳て太き
苗ハ虫つきなれ是地活えの業未なれゆえお

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

毎年植(タテ)替(カヘ)ル

毎年植替ル

里稲虫ハ田ヲ深水ニシテ株ヲ付ケ又ハ穂ヲ深ク喰ヒ又蜘蛛(クモ)ノ糸ノ虫ハ穂ヲ喜ノ田ハ十月下旬ノ晴ニ小葉(クヅ)ヲ焚(タキ)テ乳附(ウミツケ)ヲ薫ヨ

里稲虫ハ田ヲ深水ニシテ株ヲ付ケ又ハ穂ヲ喜ノ田ハ十月下旬ノ晴ニ小葉ヲ焚テ乳附ヲ薫ヨ

ヨ毎年聖(アルヒ)ノ網ヲ張(ハル)ノ患ナシ一年相州足柄郡ヨリ稗蛸ノ子ヲ拂ヒ

ヨ毎年聖ノ網ヲ張ノ患ナシ一年相州足柄郡ヨリ稗蛸ノ子ヲ拂ヒ

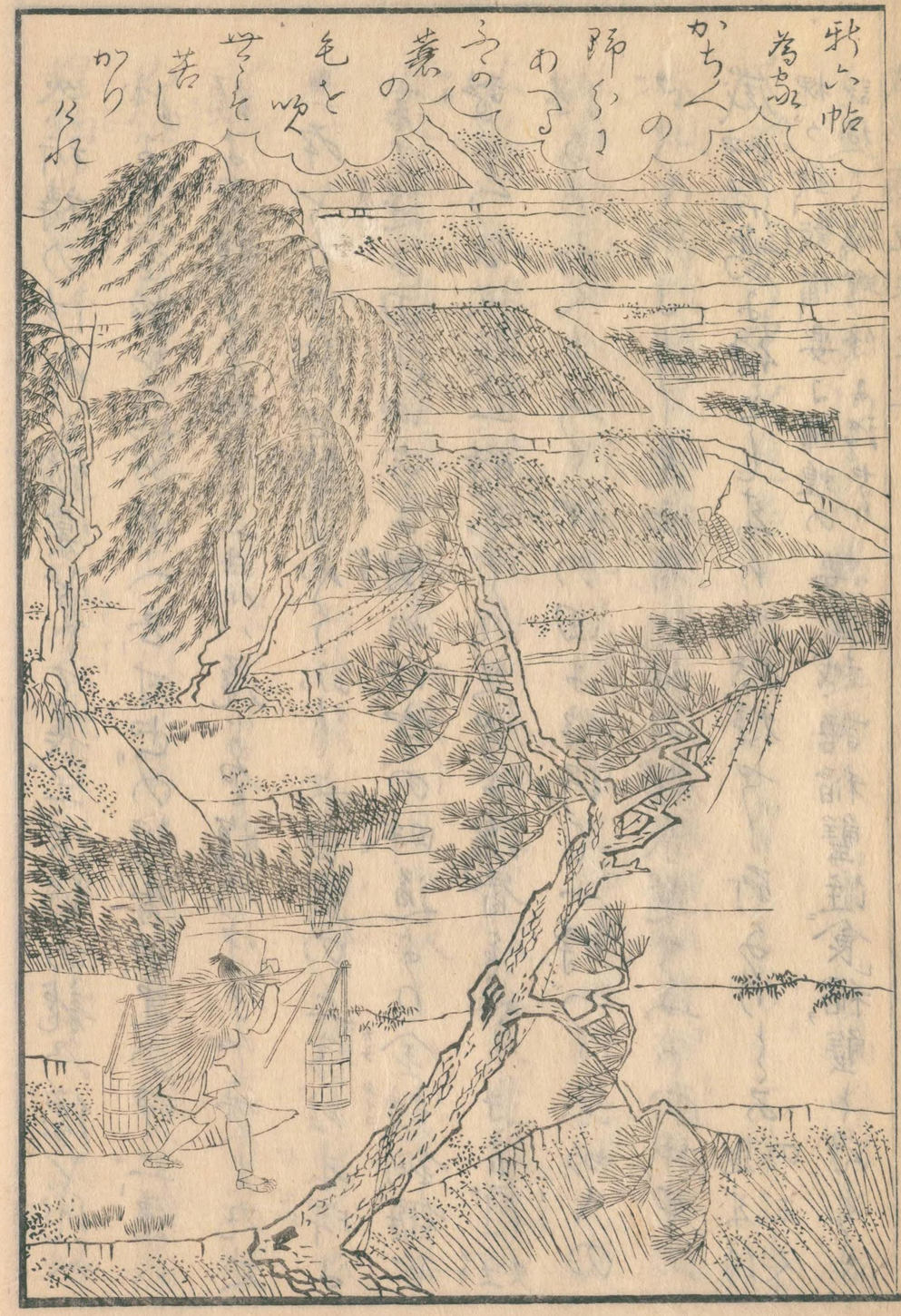
蛸ノ子ヲ拂ヒ

蛸ノ子ヲ拂ヒ

く失てぐるまわ出送い所
て救く国の中を巡歩るよ志く
大田云去蝗螽蟲賊無害我田穐田祖之神秉畀炎火
註蝗蝗則非人力所及也故願田祖之神持此四蟲付之炎
火之中也姚崇遣使捕蝗引此為證夜中設火火邊掘坑且
焚且瘞盖古之遺法如此是和漢同日の談ともいふべし
氏を之よ取るまやを改鐘鼓して田畔を繞り四方出
と捕と雲送ることあと日次紀よ入えうう或ハ芸薹清種
の油鯨の脂等と煮さ之と篠さるの法ず一〇今清人
蝗蝻と驅除ふ具所の里長夜戌の時先北方へ向て拜

祭祈禱の法あり頑豪をもて長二百餘の龍乃像を紙へ
残みて全躰を活の洞へ入寸ほの短香四束の中二束ハ
頭より腹まで焚し二束ハ尾より腹乃中まで焚し九本
二本をもて能と撃るやうふし又白虎の二字を朱牌よ
書て逆ま田の四方ま樹つ四方の畔通よ金鼓銅鑼と
撃つるまと一時ばかり其間ま絶ることなくま線香をやゝきまで炷
継もりかくして他の田ま移行て一時づゝ示のく
ざくぐるより是西省巡捕司顔家選てふもの甲申の
歳沖縄島ま使そし来りて伝授やり所ありとその逆来清
概が銭穀備要ま捕蝗の王又
説極て詳蝗條ま記やり換ま越語稲蟹注食稲蟹と名そ

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用



里平江記事云呉中蟹尻如蝗平田皆満稲穀蕩盡又天工開物云陝洛之間憂蟲蝕者或以砒霜拌麦種と四等みて漢国風土の醜薄を知べし○或人のいひしく風ハ天地をそき清るの大徳なるをもみて抜き添(タヽヘ)れバ風の凡なる時ハ邪常(ヨコシマナラザル)俊傑を出ず陽陰(テリ)を分別なき時ハ尋常(ヨキタヽ)の凡俗のミ多かるといへり里治乱の気運ハ風(ナミ)ばらくおくべし風(アシキ)を悪しとのミ思ふ穀(タネ)の実(ミモノ)人間の種をさ蒸(ムシ)熱(アツ)きおりふしハ天災の枝を不人(ヒト)カのいたすともなしがたきわざみ

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

を勅して祠ニ風神ヲ龍田立野ニ又祭リ大忌神ヲ於廣瀬河曲ヲ
ふこと戚くみそなされ祝詞ゐハ天下乃公民乃作物乎
惡風荒水尓遇都々不成傷波かどゑえうヲ
風不吹稼穡滋登大忌祭ハ令山谷水變成令義解曰風
甘水浸潤苗稼得其全稔故有此祭也嵯峨天皇弘仁
元年敕曰夏苗已成秋稼始熟恐風雨失時嘉穀被害宜遣
使畿内奉幣名神ニ令祭ハ欲令冷
信濃國風神を乎ふな風祝部の名ゐ史信濃なる本曾路
の椙呂ゐ乎風の祝ゐをきヲ乎信濃ゐハ地勢
高く極て風疾きなり是ゐ風間神社風間村等の
名乎ふるゝ儀册ゐ祠方ゐ神の社ゐ風の祝と乎ゐ

のヲ乎て涼く籠居祓ひ乎て百日の曽等ヲ乎ふことゐ
ヲさゝれバ風靜ゐて農業乃ゑ可ゐ少のさゝ曽
をみそて日乃光を只せらまバ風治ゐ乎ゐ俗事と
は只ゑゑを伝ゐふてを風の暴ハ仇物のこゝろをれバ
結風乃祭を行ふみて此事ゐ板蓋先王
敬畏のみを存して民を視るゑと傷らぐくを惻恒の
篤り上下ゐ禱爾幽冥の神功ゐ頼ゐ天地和順五穀豊
衍豈啻頭露の改道あらんやとゑの理ゐい
ゐ乎一條天皇ハ冬の夜ゐ御衣を脱ておもふ給ふ
と上東門院のまぐかくハせ乎給ふ可きゐれバ

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

日本國の民もむくろんより我ひとりあるを
らぶと仰らまじく事を後承極政よみをとらふれ
ば百姓を神とをがまむ世の中よさむ民のみの歓
あらく
今上皇帝の大御歌ひつゝ詠かさめる歓事みおりみぞよ
萬かくそのひとはいづまをれ食のふる
人よ切なれバかくはあをれこそ
あるさはたゝるべし國老談苑云宋太宗嘗冬月命撤獣炭
炭左右或啟曰今日苦寒上曰天下民困是寒着衆矣朕何
獨温愉哉と異域同日の談とくふ歟 臣國柱謹按ふ世の仁君仁人政と

為の通例を抱嫂之を庶民より求む昔吾
宰相侯征韓の役細川新寨の孤壘を嬰る守者一万人朝
鮮国より寒地夜或ハ臣庶と雑居て火を擁じて暫未嘗
て憂楽を共よりくさぐんバなくば時よ加ふ酒心の卒伍あ
るおりくらく薩軍ハ頗る主侯の礼あきよ似ふりと清正
ひて怠ふさして卒伍の不知を戒て曰上下貳ぞなく同
堂を是臣附七合ふるまりくふ級せ一ふりきれバ
明将董一元十万兵とゝて新寨を攻圍ふく数重実よ慶
長三年十月朔日吾侯戦出しゝて大ゝ明兵と撃破ふ一鼓
みゝて斬獲四万級を得ふり逐よ天兵舟師の行を敗き
永く日国の威稜を失ひ抑を布行く不君ハ一紳恩義
兼行るの技よなくぐや楠中将曰合戦の勝敗ハ
を兵の衆寡よあらぐや唯士卒志と一よふるとせぐると
のを抑治乱盛衰ハ将帥にかゝぐといつゞと理ハ
るふとくふゝ俊よ事よ因て附記ふと 此よついてハ
或老農のいふく耕作ハ修ふ子を育つるがごとく今
ハ乳がゝゝ新ぐゝ子ハ何つふ愛ゝ今ハ宝ふ

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

しと寐てゝ寐てゝ葉高まで苅(カリ)込(コミ)んと
迚(カツ)うんとゞゝてハみを洗ひ根茎(ハクキ)
ハ茎を抜(ヌキ)て両風よく接(ツギ)し洗てはこと
ば漸食(ヤウヤク)附添て厭(アキ)飽(アカ)し晨夕(アシタユフベ)よく育(ナテソダツ)
みと拘(カヽ)ず苗稼のかゝ熱ハなるゝふ
の常(ツネ)ならいつゝと女の怠情(フラチナル)仕人田地の営(イトナミ)疎(オロカ)にして
勤(ツトメ)をされバ商(アキナヒ)の日ら常産の利(リ)をそのて活(ワタラ)んと貪(ムサボ)る
ものゝ如(ゴト)く較(クラ)ぶまバ殊(コト)に雑(マジ)りて農圃の三昧を得ざるい
ふ(ゲニキ)ゞ或日(ゲニキ)無風(フウチナ)なぐ吹て田地の営(イトナミ)疎(オロカ)にして
悪(アシ)く荒(アラ)んと知(シリ)よ作(ツクリ)物(モノ)ハおのゝ(ヽ)のお風あ

ゝらめまつの(ヽ)ごとく作(ツクリ)ものゝ如(ゴト)く作(ツクリ)物(モノ)ハ実(ミ)とよくて吹(フキ)
かゝる時ハ家の内(ウチ)ゝ出(イデ)て衣(キル)物(モノ)を乾(ホシ)風(カゼ)の中(ウチ)らぎ(ヽ)
とそゝまく抜(ヌキ)ざまバ田(タ)の日(ヒ)陰(カゲ)て八風(ハチフウ)のいとゝ出(イデ)て枯(カレ)葉
物(モノ)ゝいつゝされバ大風(オホカゼ)洪水(コウズイ)の後(ノチ)は畑(ハタ)ものゝハ松(マツ)を露(アラハ)し
稲ハ優(コヽ)ゝる穂(ホ)の実(ミ)をなやゝに其時(ソノトキ)よ除(ノゾ)て助(タスケ)ゝ真(マコト)を
ぐゝと

農時不聽於是高市磨脱其冠位擎上於朝重諫曰農作之節車駕未可以動矣天皇遂不從諫同年五月詔筑紫太宰率河内王等曰宜遣沙門大隅與阿多而傳佛教矣阿多小隅今の薩摩国ノ総是本藩佛法流布の始なるべし而して己ま高市磨農时を妨ぐるの直諫を聽納ま

いまた又胡教を毒敷ん禍端を百世ノ豐ならん何代の女上う佛ま淫ノ民を傷ざるまでもあらん乎然とも同七年詔令天下勸殖桑紵梨栗蕪菁等草木ヲ助五穀又大赦天下鰥寡孤獨篤癈貧不能自存者賜稻蠲服調役ま

あり此帝まかくびして純過を悔復善政を修ま

あり史記ま粛侯游大陵出於鹿門大戊午扣馬曰耕事方急一日不作百日不食侯下車ま粛侯馬を扣ふるの諫を嘉納し柘周発ま哭まるの一中務家業ま神ちて楫しまるをはもの田を治るは知ってれ物鹿狩をするの時節を考へ農稼の害をみべらざるまし戒示してよめふせひり漢武帝嘗入南山下射獵馳驚禾稼之地民皆号呼罵詈とまま仰る什

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

成形圖說卷之三終

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用